The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新世代留学生の精神的成長に関するケース・スタディー : 日本語教育への示唆
Author(s)	範, 玉梅
Citation	阪大日本語研究. 2007, 19, p. 161-192
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』 19（2007）

新世代留学生の精神的成長に関するケース・スタディー
ー日本語教育への示唆

A case study in the spiritual growth of an overseas student of the new generation : Implications for the Janpanese language education

範 玉梅
Fan Yumei

キーワード：新世代留学生　精神的成長　キリスト教教会　居場所作り

【要旨】

中国の一人っ子の来日に伴い、第三次中国人日本留学ブームが形成され、日本語教育現場では居場所づくりが避けられない課題となっていることが、本稿の背景となっている。本稿では教会に通う一人の新世代留学生のケースを取り上げ、物語りを通して、彼女の留学生活を具体的に記述する。考察では、混乱した生活を乗り越えてきた彼女の精神的な成長において教会が果たした役割を分析している。そこから、留学生への支援を考えるには、以下の４点のヒントが得られるのではないかと筆者は考える。１．安心して相談できる環境を整える。２．若者の自分探しに関係する知識の伝授ができる場作り。３．日本語以外の能力も養える環境を整える。４．集団の中で一員として活躍できる場作り。

成長とは、過去と向き合いそれを作り直すことであって、そこに何か決まった
しかたがあるわけではない。大事なのは、その作り直しである。
（ブルーナー『心を探して　ブルーナー自伝』みすず書房）

１．　問題提起

1.1.「新世代」[1] 日本留学の背景

通信技術の発達により国際化が進んだ現状の中で、異文化の中でも通用する人材の養成は人類の社会が発展するために不可欠になってきている。一方、先進国の経済の停滞及び旧社会主義国家の民主化の拡がりと経済の発展に伴い、大きな投資を必要とする教育は各国にとって高い利潤が期待できる一つの産業として全世界的に注目が集まっている。

近年、国際競争の激化により経済発展が強い影響を受けている中国では、改革政策の実

施に伴い、経済力が高まり、社会の求める人材像も変化しつつある。「一人っ子政策」[2)]の実施は、中国の高等教育ブーム、留学ブームを推し進めつつある（範・2003）。2001年には、中国の高等教育の規模は世界一になった。それと同時に中国は世界一の留学生派遣国にもなった。

2003年、日本は留学生10万人時代を迎え、留学生は6割以上、就学生は7割以上が中国出身者となった。近年、中国の一般国民にまで拡大された留学には、私費留学生が90％以上を占め、彼らは主にアルバイトで学費と生活費を稼ぐことで、日本人と日本社会に幅広く接するようになっている。

少子化も高齢化も深刻化している日本では、日本人学生数が減少したため、多くの大学が就学生受け入れに積極的な動きを見せたという事情もあり、2000年あたりから中国からの留学希望者へのビザ発給が緩和されてきた。しかし、経済不況により留学環境が悪化している状況の中（段・2003）で、更に留学生に対する奨学金、学費免除の予算枠が減少した。そのうえ、国公立大学入試で英語の成績が要求されるようになり、私費外国人留学生統一試験が改革された。

2003年12月に出された「新たな留学生政策の展開」では、「留学生の質の向上」「在籍管理の強化」が強調され、入学・在留審査は90年代に逆戻りし、留学生のための各種の支援が切り捨てられた上、マスメディアなどで外国人犯罪が過剰なまでに大きく報道され、日本で学ぶ外国人学生の生活に深刻な影響を及ぼし始めた。日中外交関係が悪化した中、新世代留学生を取り巻く環境はけっして楽観的ではない。

日本学生支援機関の留学生受け入れの概況のグラフによれば、2004年は117,302人、2005年は121,812人と徐々に入国者数が増加していることが窺えるが、「就学」の新規入国者数は、2004年は対前年度（27,362人）45％減の15,027人となった。特に中国は19,337人から5,705人へと70％も減少したのである。入国管理局は出欠確認や生徒指導を強化した学校の努力を評価し、2000年から、不法残留者が在校生の5％未満の「適正校」が申請した学生については、約9割に在留資格を認めてきていたが、2003年の11月に方針転換し、適正校からの申請でも、中国、ミャンマー、バングラデシュ、モンゴルからの学生については、入出金記録のある預金通帳のコピーや資産形成を記録した過去3年間の資料など、他国の学生より詳細な書類を求めることにした。

2005年度4月の在留資格認定証の申請数・交付数は新規入国者が激減した2004年度並でほとんど伸びていない。倒産に追い込まれ、学校運営を継続発展させることができない日本語学校が数多いようである。このように厳しくなってきた事情も「新世代」日本留学の背景として見落とせない。

1.2.「新世代」中国人留学生の特徴

「現在の留学生は80年代とは全く違う。80年代の留学生は、大体私のような年齢で文化大革命の中で最も複雑な状態を体験し、個人の生活能力や仕事能力及び思想意識の独立性は相当に成熟していた。日本へ留学する目的もはっきりしていた。それは、新しい科学技術文化を学んで国の建設に貢献することだった。だから、苦労も耐えられた。80年代後半から90年代になると、この救国救亡の政治的な目的が段々希薄になってきた。ほとんどの人達は自我の設計というのが出発点だといえる。個人生活設計、90年代からこの方向へ発展してきて、現在では普通になっている。90年代末から、1人っ子の世代になると、国内のたくさんの人が高校の途中や高校を卒業してから日本へ来た。父母が日本留学に経済的援助をするのは、日本の教育環境は良好で、国内の大学の競争率が高いため、日本に留学すれば、高等教育の門をくぐりやすいと考えているからだ。80年代の留学生には少数だが稼ぎのために来日した人が確かにいた。しかし、彼らと違って、現在の留学生の目的は主に学習だというのが一つの特徴だといえる。」(Zh)

「(現在の留学生は)以前の留学生と思想観念、生活習慣が完全に違う。彼らにも独立の思想があって、思想の開放性と自由度はわりと大きい。しかし、周りからの束縛がすくないから、中国の伝統的な文化にも日本の伝統的な文化にも、それに対する知識は少ない。そのかわりに流行文化に染められ、随意性が大きい。いいところと言えば、皆聡明で創造性に富んでいて、好きなことならよくやれる。しかし、ある面で束縛が欠けているので、規律性も欠けている。そして国内で親に甘やかされていて、特殊な家庭環境の中で成長してきたから。多数の子供は日本に来て、この異環境の中で色々な変化に伴って自己調整ができるが、極少数の子供は思想観念の面で衝突が発生する。」(Zh)

中国領事館領事Zhのデータ(範・2003)から、90年代末から日本留学の主役になってきている一人っ子の中国人留学生たちは、今までの中国人留学生と違うことがわかる。また、留学の目的としては外国での学習を通して「個人設計」を実現することが特徴だとZh考えていることがわかる。

この数年、日本語学校の教師の間でも中国出身の学生が変化しているという認識が広がっている。「皆(学生のこと)国立大学志向が強い」。「国立大学へいけないと、すぐ諦

め、専門学校に流され」、「受動的な学習姿勢」で、「学習目的がない」、「生活管理ができない」、と教師たちは考えている。しかし「学生との付き合いをどうすればいいのか」、問題への効果的な対応策はまだ見出されずにいる（範・2005）。

中国で「小皇帝」として育てられ、問題児だとされている「一人っ子」たちの来日によって、日本語教育の現場でなにが起きているのか。このような新たな現象を解明するため、質的研究であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ[3)]を採用して筆者は「新世代」に関する研究をし始めた。範（2003）では「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」に焦点を当て、多様なデータの比較を行った。その結果、「新・新人類」の特徴はそれぞれ個人差があるが、共通点をあげると「幼い、聡明、依存性が強い、挫折に耐えられない、理想が高い、平等意識が強い」とまとめられる。これらの特徴は養育環境の影響によるものであり、様々な研究（祝ほか・2001；白佐ほか・1998；鐘1992等）でも言及されている。

ここで強調したいのは、従来の留学生と全く違う「新・新人類」は自由や無限に憧れるが、他者への依存から抜け出せないという特徴を持っていることである。この矛盾した心理が、日本に留学することにより、更に複雑な形で露呈している。

「あの時（日本へ来た時）、特に心がいつも虚しく感じていた。ずっと皆に甘やかされ、宝物のように両手で扱われてきたから、日本へ来て、パーと地面に落ちた感じで、何を言っても、いくら呼んでも、誰も応えてくれなかった（中国語では『叫天天不応、叫地地不霊』）。中国にいた時は、いつも父母がいたから、後ろ盾があった。もし私に何かあったら、お父さんがきっと助けてくれる、お母さんもきっと助けてくれるという感じだった。しかし、今は遠すぎるから、どうしたらいいかいつも分からなくて、（ほかには）何も考えてないし、どんなことがあっても、いつもどうしよう、どうしようというような感じだ。先生は授業が終わるとすぐ帰るし、だれに、なにを言えばいいのか、どうやって問題を解決できるか全然分からなかった。」（Me）

Me（範・2003）のように、ほとんどの「一人っ子の留学生」は中国では全てのことを親たちが「やってくれた」から、学習以外のことを考える必要もなかった。しかし、国を離れ、学習、生活、アルバイトを全部やらなければいけなくなり、このような「自由を管理する」ためには、どうすればいいのかということに悩んでいる学生が多いのである。

また「自由」というのは「新・新人類」にとっては、普通ではない「逸脱的な」性質を持っている。親達にコントロールされた自由が留学によって突然に自分のところに戻って

きた時に、「どうしよう、どうしよう」という準備不足の心理状態で問題に直面し、パニック状態に陥りやすい。この状態を解決できるかどうかが彼らの心理的安定状態と直接かかわっている。解決できないと、故意の孤独に走ってしまう。彼らは「理想が高いが、挫折に弱く」、自由と孤独の間の「中間値が欠けている」からである。これこそ今まで研究されてきた中国人留学生と最も区別される「新世代」中国人の留学生の特徴だと考えられる（範・2003）。

2．研究目的

範（2003）では、グランデット・セオリーの方法を使って分析を行った。その結果、一人っ子の到来に伴い、第三次の中国人の日本留学ブーム[4]が形成され、「逸脱的な自由の管理」が日本人教師と留学生が共に考えなければならない緊急な課題となっていることを指摘した。そして、その問題を解決するのには「居場所」作りが避けられない課題となっているのではないかと筆者は考える。

本稿で取り上げる新世代留学生のKのケースは、範（2003）の課題をさらに継続し、発展させるためのものの一部である。2004年10月10日の教会での留学生との偶然の出会いがきっかけで教会をフィールドとするようになったことが本稿の背景の一つとなっている。筆者はこの教会に通う中国人留学生が「2000年以前は一人もいなかったのに、2004年までに200人以上にまで増えてきた」という現象に驚き、さらに「愛があるところ」という留学生の話に惹かれ、なぜ彼らは神様の子になったのかという疑問を持ち、この「居場所」を究明しようと考えるようになった。この教会で知り合ったKは、暗い顔に徐々に笑いを見せてくれるようになり、この2年で大きな変化が起こった留学生の中の一人である。

本稿では物語を通して、彼女の日本での留学生活を具体的に記述する。その記述に基づいて、彼女の精神的な成長の軌跡を明らかにすることが一つの目的であり、さらに、「居場所」作りを具体的に提言するため、彼女のような留学生への支援はどのように行うべきなのかということも最後に検討したい。

3．先行研究

中国の新世代に関する研究では、『中国での一人っ子を巡る問題』（白佐・呉・1998）や鐘（1992）などが、新世代の幼児期、児童期に関する研究を行い、新世代の成長環境の理解及び問題の究明に大きな役割を果たしている。新世代の成長に伴ない、研究の焦点は青

年期に移ってきており、新世代留学生に関する研究は2003年の奥田（2003)、範（2003)、城石（2003）から始まり、この二、三年の間でも、中国人留学生に関わる研究成果が発表された。

奥田（2003）は日本語学校経営の立場から、学生の若年化に関する対応の必要性を強調している。城石（2003）は一人の留学生のライフストーリーを描いて留学生と共に歩み、彼らを共生社会にいる一人の人間として理解する必要があることを力説している。日本語教師である嶋本（2004）及び中井（2005）は、それぞれ、現場にかかわる問題を出発点として研究を行った。嶋本は、五人の学生のライフストーリーを通して、学生のやる気のなさという問題を理解しようとしている。中井は生徒の再履修という現象について、グランデットセオリーを用いて問題の解決方法を求めている。新世代の私費留学生である徐（2004）は、従来のアンケートのような研究方法では留学生を理解するには限界があると感じ、内的なアプローチで私費留学生の日々に欠かせないアルバイトへの理解を求めようとしている。

これらの研究から、従来日本語の授業に焦点を当ててきた日本語教育に関する研究は、教室の内から外へ注目し始め、学生を社会の中の存在としてとらえ始めたことが分かる。それと同時に、研究方法も多様化し、従来のアンケートのような量的な調査方法ではなく質的な研究方法の必要性を訴える傾向がうかがえる。

留学生を「外国人」であると同時に悩み多き青年期の若者であるという視点で捉える必要があると金沢（2002）も井上（2001）も述べている。しかし、新世代は多様性を持ちながらも、モラトリアムが延長された（奥田・2003）ゆえ、「大人でもない、子供でもない（範・2003)」時期に留学の旅に出ている。そこで、彼らを見るには、青年ではなく、少年から青年への過渡期を異文化環境で過ごしている一人の人間として考える必要があると筆者は考える。

本稿に取り上げられるＫのケース・スタディーは、彼女がどのように葛藤を乗り越え、成長してきたのかを記述し、新世代留学生への理解を深めることが目的である。

４．研究方法

4.1.調査方法

本稿のフィールドとなっているのは、大阪市内の繁華街にあるキリスト教の宣教教会である。筆者は主に教会の礼拝日や、その他、時間が空いたりした時も随時行くことにし、留学生たちの活動を観察していた。調査期間は2004年10月24日から2006年４月２日までの

一年半であった。

情報提供者のKは女性、高校を卒業してから2003年4月に来日、日本語学校を一年終え、2004年4月から2006年3月まで大阪のある専門学校の進学学級に在学した。彼女は2004年5月からこの教会に通い始め、2005年8月に洗礼を受け、2006年8月現在では準旬長[5]として活躍している。筆者は教会の聖歌隊に属し、Kは聖劇部に属している。2006年1月までは二人は教会の青年3隊に属していた。

本稿に取り上げられるデータは、フィールドノート、会話の文字化、Kの日記、電話とメールの記録の四種類である。Kの日記は2003年6月から2005年12月までのものであり、フィールドノートには教会での話し合いだけではなく、教会の外での話し合いも含まれている。会話の文字化はフィールドに参与した時に取った録音データの文字化であり、インタビューの文字化ではない。

4.2.分析方法

本稿の分析は、質的研究方法の一つ、ケース・スタディーの方法を援用して行う。Kの成長の軌跡を明らかにするために、まず、彼女の物語を時間軸で具体的に記述する。更に、考察では、Kの挫折、Kの特徴、教会の役割という三つのカテゴリーに焦点を当てて分析する。最後は、彼女の精神的な成長から日本語教育への4点の示唆をまとめる。

質的研究の妥当性に関しては、データ収集から分析に至る基礎的な過程を明らかにする、手続きの「透明性」が挙げられる（桜井2002：39－40）。本稿では、この透明性を考慮し、筆者とKの接触、あるいは一年半に渡る研究調査の過程を、Kの物語に反映させる。出来事の経過や登場人物の考えや行為の中に語り手とインタビュアーの解釈が含まれて、構成された一つのまとまりを持った語り（桜井2002：34）を、両者の共同の産物として、素直に記述することこそ、妥当性を保証すると筆者は考えている。

4.3.倫理的問題

本稿では、倫理的問題を考慮し、Kのストーリーを論文に取り上げることを本人に相談した。以下は彼女の承諾の翻訳である。

「私の生活はとても豊かで、考える事も多いし、やりたい事も多い。自分の理想が高すぎたのか、それともひねくれすぎたのか分からないが、お姉さん（筆者のこと）と知り合う前には、他の人を受け入れられなかったし、他人も私を受け入れられなかった。多くの出来事を私は全部日記に書いている。私はたくさんのことを話したいから、公開して大丈夫よ。名前さえ書かなかったら、OK。論文を書くには要らないかもしれないけど、もし

小説などを書くなら、日記を使ってもいいよ。かまわない。（淀川花見・2006/04/03）」

この本人の意見を尊重し、主人公の名前を匿名にし、Ｋで表す。書き上げた物語も本人に見せることにした。

５．Ｋの物語

はじめに

「私は方向を見つけられなくなってしまい、不安になり、憂慮し、逃げ出したくなった。諦めようとしたところに、ある光が現れ、『わが子よ、私のところへ来て。私はあなたの身を寄せるところ。私はあなたを目覚めさせ行くべき道を教えよう。あなたの上に目を注ぎ、勧めを与えよう』（詩篇：32‐8）と言った。あの過去を書いたノートを読んで、あの重い毎日を振り返り、自分の努力を通して残した一つ一つの小さい足跡を思い出して、私は泣いてしまった。理由は分からないけど、涙が止まらなかった。」

教会の月刊誌に書かれた彼女のこの一文を読んでから、私はついに決心して、その過去が書かれたノートをみせてもらえるかとＫに頼んだ。2006年７月２日、彼女から日記を受けとった瞬間、私は感動して涙を流した。彼女が私をこれほど信頼してくれているのは本当にうれしかったが、それより、彼女がやっと人間をもう一回信じてみようという気持ちになれたのではないかと思うと、神様に感謝する気持ちで一杯だった。「お姉さん、なぜ私は笑えないのかしら？」という、彼女と付き合いだしてから何回も聞かれた質問の答えの鍵は、きっとこの日記の中に隠されているのだろうと思うと、涙がにじんでくる。

5.1.憧れの日本へ

Ｋは1983年に中国の山西省にある中小都市に生まれ、５歳離れた弟が一人いる。現在の中国において、経済的に遅れているこの都市は、太原と北京に近いゆえ、明清時代には富商が次々と現れたところとして知られている。彼女の一族が昔商売で繁栄したことも、旧中国の祖父の時代からはるか昔にまでさかのぼることができる。しかし、時代が変り、文化大革命（1966～1976）に遭ったＫの父親は学校さえも行けなかった。流浪の生活を送ってきた彼は、道端の芸人の影絵芝居を通して、すこし文字を学んだが、今でも字が完全に書けないようだ。1978年の中国の改革開放政策に乗り、就職口がなかったＫの父親は鉄鋼会社を起こした。改革が進むにつれて、中国国営大企業の倒産が相次いでいたが、Ｋの父

親の会社は順調に大きくなり、Kの父親も地方の有名人になったそうだ。

Kによい教育を受けさせるため、Kの父親は彼女を故郷から離れた省都の太原に送り、Kはそこにある唯一の全寮制の「貴族学校」に、小学校から高校卒業までずっと通っていた。当時はいうまでもなく、現在でも、子供をこのような学校に行かせるのは相当な財力がないとできないことだ。Kは同年代の子と同じように毎日親に甘えることはできなかったが、学校での学習は親の期待に背かずにずっと抜群の成績だった。中学校に入ると、Kは学生委員会で活躍し始め、学校では先生たちとも学生たちとも仲良く、皆彼女の言うことをよく聞いた。校長先生とも友達の付き合いだったそうだ。周りは花束と褒め言葉しかないKはいつも自信で溢れ、笑顔だった。「まるで世界が私を中心に回っているように感じた（日記・2005/07/31）」とKは言った。

大学入試試験でも、武漢××大学（重点大学）に目出度く合格した。しかし、これは第1志望の北京放送大学ではないため、彼女は行きたくなかった。落ち込んでいた娘を心配した父親は、留学を勧めた。「日本へ留学したらどう？」と言われるとKは迷わず留学の決断をし、一週間以内に荷物を片付け、西安での日本語学習を始めたという。

半年の日本語学習を終えたKは、2003年4月に順調に来日した。北京空港まで送ってくれた父親は、泣いていた。「初めて泣いた父を見た。私一人を日本に行かせる辛い気持ちがよく分かった。けれど、これからは、自分の天下を切り開けると思うと、わくわくしてきた。（日記・2003/07/12）」という。涙を見せない彼女は既に新しい目標を立て、同年代のWang Miaoのように世界を基盤として自由な人生を送ることに憧れていた。

「Wang Miaoは一人っ子だが、大学に受からなかったことがきっかけで渡米した。英語を一年間猛勉強した後で、大学に通いながら、上院でバイトをした。卒業後、ワシントンでアパートを借り、アメリカ政府で仕事を始めた。仕事が中米両政府の貿易と政治に関係が深いので、年中ニューヨークや香港や上海の間を飛び回っていた。仕事を始めて2年後、世界を見た彼女は最後に北京に魅了され、定住することにした。やっと居場所を見つけた彼女は、一層世界的な活躍ができるようになった（日記・2003/06/29）。」

5.2.熊本での挫折

飛行機が黄色の中国大地を離れ、青海原が見えてきた瞬間、彼女は生まれて初めて自由を感じたという。海に囲まれている日本列島が、空から望むと、緑に恵まれ、非常に綺麗に見えた。彼女の心はすでにこの玩具のような可愛い小島に惹かれ、自分のものにしようという野心にも一瞬かられた。未知の新生活に多少の不安も抱いていただろうが、それを考える暇はなかった。冒険の匂いがする未来は彼女の征服心を煽っただけだった。

迎えに来た日本語学校の先生は「君たち、あらゆる苦労をなめ尽す、この世の中の地獄へようこそ」と言った。Ｋは少し不思議に思ったが、全然気にならなかった。「両親はすでにお金で弟と私の道を開いてくれた。私はその通りに歩くだけのことだ。」と彼女は今まで「普通の人間が遭う困難な道を避けてきた飛ぶような人生」を幸運に感じ、約束された将来の成功が自分を待っているだけだと思っていた。楽観的な予感の中で、彼女の留学生活が始まった。

南国の風景が北国の女の子にとっては永遠の魅力を持っているように、緑の大きな葉の熱帯植物を見るだけでもＫは満足を感じた。蒸し暑い熊本の気候に慣れるのは、大変だったが、彼女はそれを異国体験の楽しみの一つとして乗り越えてきた。最初の３ヶ月は、一緒に西安から来た小蘭と同居していた。父親が裁判官である小蘭はＫより７歳年上で、大学を卒業して仕事を三年間した賢い女性であり、化粧も料理も何でも教えてくれるし、バイトと学習の選択に悩んでいるＫを見ると、「あなたは他の人と違い、視野を広げるためにここへ来たのよ」といつもＫに注意をしてくれた。

キッチンに入ったこともなかったＫは、自分がお金を出し、小蘭に二人分の料理を作ってもらう生活パターンをこれ以上合理的なことはないと思っていた。両親への電話報告は楽しい事ばかりだったし、故郷からの大きな小包が届くたび、喜んで同期の皆に分けていた。短時間の幼稚園バイトを通して、初めての日本人の友だちができたＫは日記にこのように書いている。「最近佐藤さんと一緒にいろいろな祭りに参加した。日本語の進歩を感じた。今後も日本人ともっと接触してたくさんの友達を作りたいと思う。いい一日だった」。

ところが、このような日々は長くは続かなかった。小蘭は大学院の研究生に決まり、一人で引越してしまったのだ。周りの人たちも皆それぞれバイトと学習に忙しくなった。一人の時間が増えたＫは、幼稚園の佐藤さんとの付き合いを積極的に深めようとしたが、なかなか中国人のように親密な関係にならないことに悩んだ。ある日、台湾のことと靖国神社のことを、二人で話したそうだ。「台湾は中国の領土ですかと彼女に聞かれた。当然だと私は彼女に教えてあげた。彼女は常識がなさそうよね。失礼な質問をした。また、日本の侵略が真実であれば、中国側に賠償しないことは有り得ないでしょうと言われた。私はもう答えたくなかった。なぜ靖国神社問題でよくもめたのかがやっと分かった。中国人の広い心がバカにされているからだ」。Ｋは、佐藤さんとの距離を乗り越えることができないだろうと感じた。

それと同時に、小蘭に利用されたＫのことをバカだという噂が学校に流れ、孤立した彼女は同期の皆に不信感を持ち始めた。彼女はこの不愉快な気持ちを発散するため、バイト

を始めようと考えたが、レジの仕事に面接に行くと、日本語でうまく自己表現できない自分を初めて発見した。そして「受かったとしても、お金を間違えたら、責任を負うことができないだろう」と思ったKは、自信がなくなった自分のことに敏感に気づき、一夜も眠れなかった。

5.3.自己否定の始まり

バイトはしなくてもよかったのだが、食事作りを面倒くさく感じ、学習にも集中できないKはついにホームシックに陥った。2003年6月1日から書き始められた日記には、「家に帰りたい。父と母を思い出した。お父さん、お母さん、愛している」というような簡単な日本語で書いた内容が何日も続いていた。両親が自分に大量の投資をしてくれたので、Kは自分がこのままでいけないと考え、たまには日記で「これはただ一時的な落ち込みだから、日本語をじっくり勉強して、自分の目標を実現しよう」と書き、自分を励ましていた。

6月26日に中国で幼なじみの二人の親友が付き合い始めたという友人の電話から、Kはすこしショックをうけた。女の子は一番の親友であり、男の子はKの当時の彼氏だったからだ。一番に信頼していた二人に裏切られたとKは悲しく思ったが、「許してあげる、男の子っていくらでもいるから」と自分を慰めた。

夏に入ると、皆は段々進学と留学生統一試験のことを話し出した。心の準備がまだできていないKは、自分の生活に混乱を感じ始めた。部屋で長い時間をかけて自己の気持ちを整理しようとした。「自由すぎるせいなのか、生活のリズムが崩れた気がする。圧力があったほうがいいかも」と考えるようになったKは、近くの料理屋さんでバイトを始めた。いろいろなことを覚える必要があるキッチンの仕事は大変だったが、彼女は一つ一つの進歩をみせた。しかし、「だれかと相談したいが、相談できる人がいない、いない」と、彼女の心の混乱状態はバイトを休んで整理しても、ちっとも改善されなかった。

7月3日の日記に、「交通事故、怖いですから、アパートへ帰った。休みの生活はとても難しいね。帰りたいです。」とあった。その日、自転車に乗っていたKは、車にぶつかられた。Kは大怪我をしなかったのは幸いだと思い、一万円の診察料と4千円の自転車修理代を自己負担した。一見簡単に終わるはずだったが、この影響はその後4ヶ月も続いた。

怪我で静養していたKをだれも見舞ってくれなかった。「国内にいたら、絶対こんなことにならない。きっとみんな見てくれるだろう」と、彼女はすこしだけ友達に馬鹿にされた気がした。両親が送ってくれた食べ物をいつも皆に配ったりしていたのに。事故を思い

出すと、あの日、車を運転していたおばさんの怒りの言葉はわからなかったが、罵られたような気がした。あのおばさんが悪いのに、なぜ自分を怒ったのか分からなかったＫは、日本語が分からない外国人の私をいじめていたのではないかと推測した。しかし、「他人の土地だから、我慢するのが得だ」と彼女は悲しく思った。久しぶりに学校に行ったら、「最近、学校へ来なかったけど、どれぐらい儲けたの？」と聞かれ、彼女はまたショックを受けた。

試験まで日がないと感じるＫは、皆のことを気にせず勉強に専念しようとした。しかし、すべてのことがうまく行かなかった。Ｋに車をぶつけた女の人が10月に彼女の学校に６万５千円の車修理代を請求しにきた。事件が複雑化したことを感じたＫは、事情を担任の先生に説明し、すべて彼女に任せた。しかし、一ヶ月後、裁判所からの通知が届いた。「亡霊がいつまでもつきまとうようだなぁ。（中略）私はあの人に訴えられたようだ。あの人はなにをしたいの？この貧乏な留学生からどれぐらいゆすりたい？先生はどうやって処理したの？なぜこんなことになってしまったの？」Ｋは悲憤やるかたなくなり、日記に怒りをぶつけた。「黒と白が逆になった。外国人しかも日本語が分からない私を馬鹿にする気？」彼女は、裁判に行く意志を先生に伝えたが、先生は彼女のために集めたお金（学校３万、クラス２万、先生1.5万）をあのおばさんに渡し、事をおさめた。しかし、彼女のプライドは深く傷つけられた。「先生は好意でしたのかもしれない。でも、あの目はまるで私が悪かった、私が嘘をついたとでも言っているようだった。くやしいな。私は人にお金をあげる人なのに、今後、皆にどう思われるのか。」とＫはやりきれない思いをした。

同じ時期にバイト先で日本語の不十分さを日本人に嘲笑されたのに、その場にいた留学生がだれも助けてくれなかったことがあった。試験をなにより大事に思うＫは、大学出願書類作成についてある先生に頼んだ。しかし、「先生は、いつも忙しそうで返事をしてくれなかった」。よく観察すると、この先生は担任の先生と仲がわるそうだということを発見し、Ｋは、「私を犠牲にするつもりなのか。でも、私の将来は冗談事ではない」からと先生の助けを諦め、自分ですることにした。混乱の中で大学を受験した彼女は初めて不合格の失意を味わった。同じ地方から来た別の二人の子がそれぞれ大学に決まったのをみて、Ｋはすべてのことに絶望を感じた。「ここは私の居場所じゃない。」とＫは思った。適当に大阪の専門学校を選んで、だれにも挨拶せずに、熊本から逃げ出した。

二年後のＫは、最後に自分の荷物を片付けてくれたバイト先の店長の優しさを思い出したが、当時はそのような優しさに気づくことができなかった。当時の彼女の気持ちは日記にこのように書かれている。「帰るべき家がない。いじめられたような感じ、どうしたら

よいか分からないような感じ…天下（新しい道）を切り開くことは本当に難しい」と。

5.4.大阪での新生活

大阪は熊本と違い大都市だから、この知り合いのいないところで生活できるのかとKは不安を大いに感じたが、将来の選択肢が多いかもしれないという期待感も抱いていた。大阪のことがわからないKの部屋探しはなかなかたいへんだったが、不動産屋で劉君と出会い、Kはすこし自分に自信が付いた。4歳年上の劉君も一年の日本語学校を終えて専門学校に上がったばかりだった。彼に付いて色々なところを探して最後に南大阪にある家賃2.6万のアパートに決めた。二階に入居し、一階にいる劉君と兄弟のように支え合いながら、新生活を始めた。小さい頃から一人で生活してきた劉君は一人っ子だが、なんでもできそうであり、非常に綺麗好きな人だった。彼女にとって、軍事や経済に詳しい劉君は外の世界への掛け橋のような存在だった。

Kがいる専門学校の進学課程クラスは、同年代の中国人留学生がほとんどだった。しかし、人生のどん底を象徴するこの場所が自分の居場所だとは思わなかったし、勉強に熱心でない皆を見るだけでも嫌になった彼女は、彼らと仲良くしようとさえ考えなかった。学校の日本語の授業は日本語学校とあまり変りがなかったが、歴史の授業とマナーの授業には興味があり、彼女はいつも一番前に座って授業を受けた。様々な知識を身に付けたかったKは、先生の注目を集め、授業が終わっても先生は彼女の質問にいつも親切に答えてくれた。

五月のある日、一人の先輩が教室にキリスト教の紹介をしに来た。彼女の話によると、難波のあるキリスト教教会では中国人の留学生がたくさん集り、助け合いながら、有意義な生活をしているという。好奇心が湧いたKは、礼拝日に先輩に連れられ、初めて教会を訪ねた。その日の体験は新鮮だった。帰り道で教会の近くの焼き鳥屋さんに寄った。バリバリの商売人である女社長の風采に引かれ、彼女は思わずバイトを申し込んだ。次の日は面接で、「今日の面接は前と違って、私から聞きたいことを全部聞いた。もちろん、最後に社長を褒める言葉も忘れずに言った。気分がよかった」。Kは自分の予想通りに採用された。

その店の店長は、親切な人であり、Kに色々教えてくれた。客がいない時、お酒好きな店長は彼女と二人で飲みながら、よく話しをした。他には50代のおばさんが一人、18歳のパチンコ好きな痩せた男が一人いた。この小さい世界から日本を体験していたKは、偶然に食事に来た一人のお婆さんに出会った。留学生支援のボランティアをしているお婆さんは、阪神大震災の時に山の上まで食品を送ってくれた二人の中国人留学生の恩を受けたこ

とがあるらしい。Ｋも留学生だということを知ったお婆さんはそれから、店によく寄るようになり、彼女を励ましてくれた。

すべて順調に進んでいるように感じたＫは、一年半ぶりに帰国した。以前自分のために事故に遭った父親のことをずっと心配していたからだ。会社は既に大きくなっていたが、相変わらず質素な生活を送っている両親を見ると、両親がやっていることのすべてが弟と自分のためだとわかり、両親の愛に応えるために有名な大学に入ろうと再び決心をした。

5.5.私たちの出会い

私たちの出会いは、2004年10月に初めて私が教会へ行った時のことだった。青年３隊の集会に案内され、そこで自己紹介をした私は、初めて来たからかもしれないが、たくさんの人からやさしい声を掛けられた。緊張感と不安が多少解消された時、「お姉さんも西安の出身ですか。私も西安で日本語を勉強しましたよ。日本語学校で一緒に住んでいた人も西安の出身です。お姉さんにすごく親近感を感じてます」と彼女は積極的に話しかけてくれた。遠く離れた故郷の話は異国で特に懐かしく感じたのかもしれない。彼女との距離はグッと縮まった。色々な話から中国の一流大学に行かずに日本へ来たということを知った。実は、青年隊隊長の小椿の電話を何度ももらっていたＫは、この日、久しぶりに来たという。バイト先は近いが、何ヶ月も来なかった。教会の皆が貧乏で話しが合わないと失望を感じたからだとＫは言った。

同じ青年３隊にいても、聖劇部に属している彼女と聖歌部に属している私とは、すれ違いが多いため、あまり話をするチャンスがなかった。だが、彼女のことがずっと気になっていた。教会の留学生たちとは違い、まったく笑顔を見せない彼女があまりにも特別だったからだ。それからの日々は飛ぶように経ち、あっという間にクリスマスになった。聖歌部と聖劇部は一緒に公演する計画があったため、Ｋと私は接触する機会がすこしだけ増えた。聖劇を練習する彼女の姿は真剣だった。キリスト誕生を象徴するクリスマスはクリスチャンにとって一年のうちで最も平安と幸福に溢れた日であり、永遠の祝福が受けられることを意味をしている。教会では留学生たちが長く練習してきた歌、聖劇、ダンスが一度に披露され、クリスマスの雰囲気が一層盛り上がった。公演後のプレゼントははじめて参加した私のような留学生にとっては、意外な驚きと喜びだった。公演成功を祝う食事会は、近くの商店街で行われ、30人ぐらいの留学生が参加した。知らない人が多かったが、賑やかな食事会での話し合いが皆の心を暖め、おかげで私も久しぶりに思い切り笑った気がした。真冬の夜中で、風が強かったはずだが、全然寒さを感じなかった。しかし、帰り道、Ｋの一言で笑っていた皆は急に静かになった。「日本の社会はとても邪悪だと思う。

人間同士がお互いに心を開かないから。」という彼女の話がどうしても気になってほっておけなかった。

彼女の日記を開くと、「聖劇をやるのが面白い。こういうことが好きだから、第1志望の放送大学にこだわった。」と彼女は自分が教会にいる理由をはっきり書いていた。Kは聖劇隊副隊長の黄がいつも彼女に挨拶をしてくれたおかげで、「すこし自分の存在感を感じた」が、相変わらず自分から他の人と話しをしたくないし、皆も自分と話しをしたがらなかっいと思っていた。彼女は、自分の存在感の薄さに苦痛を感じた。ニュースに関心を持ったKは、段々日本語が聞き取れるようになったが、親子の殺し合いや虐殺などの暗いニュースの連続で、日本社会を見るのが、怖く感じた。さらに外国人犯罪などの放送から、自分が歓迎されない存在だと分かり、日本人を警戒し始めた。バイト先の青年のことを「彼は私とほぼ同年代だ。お酒に弱いから、憧れのホストの仕事を諦めたと言っていた。理想がない人だ。だから、お金を全部パチンコに使ってしまったんだ。」と蔑視しながらも、大きな文字で書いた「銀座の王女」という日記のページには、様々な金持ちと会話ができ、お金がたくさん入ってくるというホステスの生活に憧れるように詳しく記述していた。「中国人の道徳観は、この社会であまり通用しないかも。だって処女（バージン）は笑われることだし、水商売の女たちは普通の人より正々堂々と番組に登場している」とKは様々なことに矛盾を感じた。

クリスマスが終わり、新しい一年が始まった。Kは憧れの有名私立大学を受験した。しかし、落ちてしまった。ショックを受けた彼女は、自信がなくなり、バイトに走った。「両親に電話をしない、だれにも会わない」日々が3ヶ月も続いた。

5.6.クリスチャンになる

5.6.1.修練会に向かう

4月になると新学期が始まり、教会でも一週間の神学院が終わって、伝道の時期に入り、皆忙しくなってきたが、Kの姿は見かけなかった。伝道の反省会が行われた日に彼女の姿を久しぶりに目にした。彼女は一所懸命に餃子などの中華料理のチラシを作っていた。隣にいる旬長の崔さんは手伝いをしながら、「彼女は偉いですよ。今回学校の学園祭のリーダーに選ばれたんですよ。」と自慢げに言った。Kは「お姉さん、いつか一緒に食事をしましょう。お姉さんと話をしたいから」と私を見つめて真剣な顔で言った。「いいよ。いつでもOK！」と気軽に答えたが、彼女の顔から不安を一瞬感じた。

5月、教会は伝道時期から旬員を育てる時期に入り、洗足式では、皆幸せそうに自分の旬長に足を洗ってもらった後、一緒にお祈りをした。隣に来ていたKも、大声でお祈りを

した。彼女は真剣な顔つきで涙をずっと流していた。そして「お姉さん、このようにやってみてね。声を出して祈ってみて。こうすれば、らくになるよ」と、声を出す祈祷にまだ慣れない私に言ってくれた。６月に入ると教会の方針が変わり、積極的に各青年隊の自己運営を勧めるようになり、青年３隊の集まりにも変動があった。各隊員の誕生日は青年隊で祝うことになり、旬員たちの交流も30分ほど設けるようになった。初めてのお祝いパーティーは賑わい、Ｋと同時期に来た皆は平安と快楽を得たが、Ｋだけは「どうして私はたのしくないの？」と呟いた。

その後Ｋは受洗前の学習に参加し、７月から十分の一[6]を出すようなり、クリスチャンになる準備ができたようだった。７月24日の旬員交流をリードした金幹事は、交流が終わる直前のお祈りをＫにやってもらった。彼女のお祈りがうまいことに皆はびっくりした。金幹事も意外だというように笑い、「Ｋのお祈りは僕より上手ですね」と彼女を褒めた。この日から、Ｋは夜9時からの中保祈祷会にもきちんと出るようになった。彼女は、旬長の話に従い、神様の救いを求めようと積極的に考えるようになったようだ。

７月に入ると、修練会の雰囲気は高まっていた。聖歌練習も聖劇練習も山場に入った。神様の恵みを期待しているＫは、一度も欠席しなかった。教会に長くいると、Ｋは親に頼らずに奮闘している教会の人たちを見て、自分のことを恥ずかしく感じるようになり、自分が子供のままではいけないと成長意識が強まってきたという。７月10日に「大人という概念は何ですか」と私に聞いたことがあった。私は自分自身、母親が亡くなってから初めて大人になった感覚をもったと素直に彼女に話した。金銭面での心配が全然ないＫは、ずっとここで唯一やることは学習でそれ以外のことはしなくてもいいと思っていたそうだ。しかし、お金があることと個人の成長は違うと最近周りの友達に言われ、一人で困難に直面せざるをえない場合でも「負けない」と信じて行くのが大人だと思うようになったそうだ。「自分も早く大人になりたい」と彼女は言った。

ところが、聖劇練習にも受験勉強にもより一層力を入れるようになった彼女は、引越しの悩みで顔色が悪くなり、かなり痩せてきた。Ｋは今の住まいがバイト先や学校に遠く、時間を効率的に利用できないので、引越しを考えていた。しかし、劉君と離れたくなかった。矛盾を克服できない自分に焦っていた。「髪のスタイルを何回か変えたが、まだだめ。落ち着かない」彼女は「だれかに相談したい。しかし、相談できる人がいない。最近は人と話をしたことがないような気がする。以前より話しが出てこなくなったような気がする。まだ会話の練習が必要だ」と不安を感じた。一ヶ月ほど悩んでいたＫは８月７日に私に相談した。彼女はいつもと同じようにとてもゆっくりしたスピードで話し出し、「以前の私はこんなではなかった。日本へ来てから私の心は氷になって、行動も遅くなってき

たし、声までも変ってきた。」と自分のことを全て話してくれた。ほぼ一時間半の話の間、彼女はずっとうつむいたままだった。

5.6.2.第三回目の修練会

よい天気が続く中、年に一度だけの修練会が2005年８月15日から始まり、参加者は200人近くにのぼった。今回の主題は「ビジョン」であり、若者がどのように自分の夢を掴むかという内容をめぐって世界各地から応援にきた牧師たちが演説を行い、「科学と宗教」、「成功の秘密」、「異性交際」等々用意された13の講座も大人気だった。

三日目の夜は修練会の山場だった。４時からのＫたちの聖劇公演は大成功だった。韓国からのクリスチャンたちも聖劇に出演した。最後のステージは皆が舞台に誘われ、自由に歌い、自由に踊り、会場の雰囲気は一気に盛り上がった。賛美が始まり、皆の心は更に開かれ、歓声の中で三時間も過ごした。その後の燭光パーティーは感動的なものだった。徐徐に高らかに流れていく賛美歌の中で、白い蝋燭の光に囲まれた静かな雰囲気が、聖的な感動を与えてくれた。皆は兄弟姉妹のように抱き合い、祈ったり泣いたりした。最後の受洗式には受洗者が23人もいたが、Ｋは一番に舞台に上がって涙を流しながら洗礼を受けた。

18日に第三回目の修練会は牧師のお祈りで終わりを告げた。彼女の荷物を二人で分担して持ち、地下鉄まで行くうちに、ゆっくり色々な話ができた。集団生活が苦手と言った彼女は初めて大勢の人と一緒に泊まることになり、慣れないので苦労をしたようだった。シャワーの水が少なくて、浴びにくかったそうだったし、泊まるところが汚くて、よく眠れなかったから、行ってすぐに帰りたくなった。お昼の鶏肉も新鮮ではなかったから、どうしても食べられなくて全部他の人にあげたという。しかし、今回の修練会では、神様の恵みの話になると、感動して何回も涙を流してしまったという。帰ってから感想を書くという彼女の話から、日本へ来て二ヶ月後から書き続けてきたこの日記の存在を知った。

そして、彼女は日記を書くことで自分をしっかり整理できるし、自分の人生観と価値観を発見できるから非常にいいことだと、私にも勧めてくれた。留学生活はだれにとっても特殊な経験だと思うが、彼女は、「特に特殊すぎる」この経験をこのように語ってくれた。「変化が本当に大きすぎる。今回、もっと大きな変化が起きたと感じた…実は昔の私はとても単純な人で、単純に周りの人と関ってきた。けれど、日本へ来て、この社会は本当に冷たいと分かってから、段々、自分も心を閉ざすべきだと思うようになって、本当の自分を隠して他の人と同じようになろうとした。自分に関係のないことに絶対かまわないように関心を持たないようになろうとしたが、たまにはそれはやりすぎじゃないかと自分も思

う。とても疲れていると感じる。それは私じゃないから。」クリスチャンになったKは本当の自分を取り戻したいと言った。

5.7.修練会後の変化

5.7.1.礼拝日のお証し

修練会直後の礼拝日に修練会で感動した7人はお証をした（神様が存在するという個人の経験を皆の前に語ること）。Kは4番で心細そうに皆の前に出てきた。皆は「はやく、はやく…」と笑いながら、催促したが、私はそれをすこし意地悪く感じた。泣き顔より変な彼女の笑顔が、皆の大笑いを誘った。私はその時から涙がずっと止まらなかった。

そこで彼女はこんなことを語った。ずっと自分のことを上帝の寵児だと思っていたKは、この修練会で神様が自分の心を開き、自分の心に神様を迎えられるように毎日お祈りしてきたという。彼女の話しによると、彼女は昔はいつも明るい女の子であり、どんな事でも笑い、小さい頃から笑って大きくなってきたという。10歳の頃、笑い過ぎて母に叱られた事さえあったのに、日本へ来て二年、笑顔がなくなり、笑えなくなってきた。「私はよく神様にこうお祈りします。『私の笑顔を返してください。私は本当にこれが必要なんです。これが私の生活に必要です。』返してくださいと何回もお願いしました。けど、見つけられません。いくらお祈りしても見つけ出せません。」とKは泣きながら言い続けた。「本当です。私は笑えません。修練会の時に、あの牧師様は中国人は皆笑いが好きではないのかと聞いたが、笑い出せないんですと私は彼に言った。笑えることが本当にないから、頭が真っ白です。大学に行きたいのに、二年も過ぎて、行動が遅いせいなのか、要求が高すぎるせいなのか、なかなか受からない。自分のことに本当にびっくりしてしまった。なんでも遅い。信仰についても、私と一緒に来た人は皆情熱的だが、私にはまだ信仰心がなかった。」とKは自分の焦っている心情を皆に告白した。

しかし、ずっと生活に混乱を感じていたKは、今回の修練会によって、「私の心が開けて、本当に聖霊に溢れるように感じた」。自分の考えを捨て、神様がきっと導いてくれると信じるようになったと続けて語った。皆は途中から彼女の話に静かに耳を傾けるようになり、最後には彼女に熱烈な拍手を送った。

9月に入ると、教会は特に新旬員の育成に力を入れ、Kは皆の祝福の中で自分の誕生日を迎えた。皆から褒め言葉を一杯もらったKは声を震わせながら、このように言った。「小椿さんを通して、私は人間の愛を知り、崔さん旬長を通して、私は神様の愛を知った。洗礼を受けた時はとても感激したので、自分が何を言ったのか覚えていなかったが、舞台を下りると、隣にいた女の子に『K、さっき自分が何を言ったと思う？』と聞かれ

た。自分は『私もやっと自分の家を見つけた』と何回も呟いたらしい。そうですね。私はやっと日本で自分の家を見つけた」。確かに受洗から、Kは教会にいる時間が増えてきたし、日記を読むと、神様への告白が日々書かれるようになった。以前は修練会の天道歴程で声を出して意見を述べる勇気さえなかったKは、変り始めた。

5.7.2.自宅訪問とバイト先での食事

修練会は忘れがたい記憶になり、日々の関りが私とKの友情を育ててくれたおかげで、いつの間にか、私たちは何でも話せるような友人になった。9月の中旬頃、Kの自宅を訪ねたことがあった。二人で夕食を食べながら、長い話をした。

本を読むのが大好きな彼女は、政治や金融などのことを一杯知りたいが、日本語が読めないことを残念に思っていたし、ずっとギターを習いたかったが、実現できなかったと言った。教会での活動がすこしだけこの残念な気持ちを癒した気がしたという。

両親の話しになると、Kは涙を流した。勝ち気なKを心配している母親は、ずっと大学は有名ではなくても構わないといい続けてきたが、彼女は、自分の父親が故郷で有力者だから、神様の栄光をたたえるのと同じように父親の栄光もたたえたいと思い、有名な大学に入ることを目指してきたという。昨年の失敗で自分の殻に閉じこもったKは、テレビでニュースを見たり、捨てられた新聞を読んだりしてきた。日本社会の暗い面に危険を感じたが、おかげでヒヤリングも読解も大分進歩したようだ。

あの日私は彼女の家に泊まった。食事後の片付けもお風呂の用意も全部Kがやってくれた。翌日の朝、起きると、彼女は既に朝食を用意してくれていた。牛乳を飲み、彼女が作ったサンドイッチを食べ、私は人に世話をしてもらう幸せを久しぶりに感じ、胸が一杯だった。

後日、私の意見を聞いて、彼女はバイトを辞め、まっすぐ受験勉強に入った。最後の給料日にKは私を誘い、バイト先で食事をした。以前の店長はお酒を盗んでやめさせられ、現在の店長は二十歳ぐらいの青年だ。「新しい店長より手早いし、お客さんも全部見れるから、皆に頼られている」とKが自慢げに言ったことを私はまだ覚えている。

サービスをしてくれたのは南京から来た20歳前後の女の子だった。Kの話によると、この子は今大学生だが、勉強にあまり熱心ではないらしい。しかし、音楽とファッションに詳しいから、今の若い店長と話しが合う。いつも馬鹿のように笑いながら、仕事でミスをしても許されるという。「私はだれかに言われるとすぐ直すが、彼女は何回言われても、直さない。でも、彼女の両親は大学教授だから、うちの両親より社会的な地位があって、羨ましい。」とKは言った。バイトを辞めたKは、女社長と長い付き合いをしたい気持ち

を電話で伝えたかったが、自分が子供だと無視されるのが怖くて諦めた。

私の目を見ながら話せるようになったＫは、教会の皆の話をよくするようになり、特に皆を愛している小椿のことを感激したように何回も話してくれた。

5.8.受験期の明暗

5.8.1.志望大学への熱戦

精神状態がすこし安定したＫは全力で新たな挑戦を始めた。長い受験期の戦いの中で、希望の光が見えなくなり、弱気になる時がＫにはよくあった。あまり会えないが、メールで彼女を応援しつづけた。「何も分からなくなって、頭が真っ白になった」時には、自分のことを信じられなくなり、「英語がやっぱり難しい。どうしよう。時間もあまりないし、お姉さん、私は無理をしているんでしょうか。今まで。」と自信がない話をＣメールでよくした。しかし、私がすこし励ますと彼女から「苦労した末の成功は何よりうれしい！たとえ失敗しても後悔しない！今までの努力は絶対にどこかで役に立つ」というような返事がまた来て、私の励ましにもなった。同じ聖劇部で活躍しているＫと解放君は、励ましあう友だちになり、それぞれ自分の目標を目指して奮闘し始めた。

勉強できなかった父親の夢を叶え、将来は父親の手伝いをするため、経営学部を志望したという理由書を書くことによって、彼女は未来の自己像を具体化した。まだ日中貿易発展の掛け橋になろうというほどの大きな考えはなかったが、留学生活が無駄ではないことを深く感じるようになった。11月10日に大学の試験があり、13日は留学生統一試験だった。統一試験で得意な数学がよくできなかったＫは、母親に電話をかけて泣いた。そして18日の試験結果発表ではやはり不合格だった。「昨日夢を見た。不合格だって、やっぱり仕方がないから、他の大学へ行くしかない。苦しいけど、頑張ります。でも目茶苦茶大変だった」。彼女は深夜まで眠れなかった。

20日の収穫節は、寒い日だった。薄着だったＫは顔色が悪かった。失敗は予想通りのことだから、大丈夫だと皆の慰めに気力なさそうに答えた。「私を入れないことはあっちの損だと思うよ。○○大学は人を見る目がないとうちの先生も言ってくれて私を慰めようとした」と言い、彼女は笑い出した。彼女を元気づけるため、教会の先輩たちは、ＰやＣなどの大学が学生を集められずに悩んでいるという話を色々持ち出した。しかし、彼女は「そのような大学には行きたくない。そうなってしまったら、すごく悔しくなる」と言いながら、泣いていた。このような大学では、皆勉強も生活もいいかげんに過ごしているからだという。不安を感じたＫは、大学を７つも応募した男の子の真似をすることまで考えた。

すこし落ち着くと、Kは、ある公立大学を受験することにした。受からなかったら、国立大学に挑戦しようと考えるようになった。私が領事館の公証書発行の再開を彼女に伝えに行ったのは11月27日のことだった。天気は相変わらず寒かった。３階にいるKは静かに「日米貿易」の記事を古い新聞から切り、自分のノートに挟み入れているところだった。今回希望した人間行動学は彼女が本当に興味を持っている専門であり、彼女はこの講座の内容などに非常に詳しかった。試験当日、小論文も面接も少しできなかった部分があったが、ほとんどよく出来たという嬉しそうな報告をしてくれた。しかし、結果は不合格だった。うわさでは今年は一人も合格できなかったという。

5.8.2.意外な展開＝編入成功

運命がいつも意外な展開をみせてくれるように、Kは行きたくないと言っていたＳ大学を受験することになった。応募締め切りの当日、なにも準備をしていなかったKは、先輩の李さんについて行っただけだったが、彼は彼女の代わりに願書に全部書き込んでくれ、近くのコンビニで写真を取らせ、二時間以内に手続きが全て終わった。試験日は同じ週の日曜日だという。あまりにも順調だったからかもしれない、Kはこれは運命だと感じた。

受験後のKがスーツのまま教会に戻ると、礼拝は既に終わり、Ｓ大学の韓国人の女教授が自分の留学経験を話している最中だった。教授が皆に質問ないかと聞いたところ、解放君が手を上げ、興奮した様子で立ち上がった。「先生はＳ大学の教授ですね。うちにも今日受験生が一人います。」と話し出した。「僕はもう帰国することにしましたが、彼女は本当に優秀です。彼女が大学生になれなかったら、ここの人たちは皆大学生になれないと思います。教授、どうか彼女を大学生にしていただけませんか。」解放の行動は、あまりにも周りを驚かせた。Kも緊張した様子で席を立って教授にあいさつをした。教授は、今日はここへ来なかったら、面接官のはずだったのにと残念そうに言った。Ｓ大学出身の女教授の奮闘史を聞いた皆は、すこし出発点が低くても明るい未来が作れるということについて、交流の時間で活発に話をした。

「運命が私をこの大学に導いてくれたから、私は行くわ。しっかり勉強して、近い将来大学院に行こう」というKは、ずっと大学生になるのに憧れていてこの夢が実現できるかどうか分からなかったので緊張してきたという。今回の結果は皆の予想通りで、彼女は大学に合格した。祝福の中に国立大学を勧める声もあった。「夜、留学生統一試験の成績が分かった。日本語258、綜合147、数学128、全部で533点。どうしたらいいの？私も分からない。神様の意志に従おう！（日記・2005/12/22）」とKは迷っていたが、結局積極的に行動しなかった。

5.9.未来に向かって

5.9.1.新年の始まり

2006年の２月になると、皆それぞれ行く道が大体決まり、教会では春節を迎えるムードになった。新年を教会で過ごしたＫは、旬長たちが作った餃子を食べ、「知恵の言葉」のおみくじを引き、皆と色々な楽しい話をし、心が温かく感じたという。「実は私は愛情で一杯の人だ。言さんたちを見ると、本当に弟のように可愛く思う。今回は自分も愛を人に分けることができてうれしく思う」。Ｋはかつて準旬長になることに自信がなくて断ったのだが、今では旬員の面倒を熱心に見るようになり、中旬長の崔さんにも中国語を教え始めた。

さらにＫは海燕の紹介でバイトを始めたが、店長によく褒められるし、日本語も最近考えずに口から飛び出すようになり、若い店長とよく冗談を言ったりしているようだ。「私は本当に海燕（来日二年目の頃から、母親が事故で昏睡状態になっている）に感心しているわ。以前は福建省の人を心の中で馬鹿にしていたけど、海燕をみると、福建の女の子は本当によく我慢するなぁと思った。私が彼女だったら、きっと笑えない。でも、海燕はまだ笑えるなんて…」。Ｋは海燕から元気をもらったという。

Ｋは大学が決まり、学費も皆の応援で全部自分で出した。解放君も帰国して会社を起こすことにした。ある土曜日に半年前にＫと解放と私とで約束した食事がやっと出来た。解放は自分の「ベンツ」（自転車）を押し、三人で笑いながら、近くの店まで歩き、楽しく食事をした。皆自分の苛められたことや落ちこぼれたことなどをたくさん話した。修練会以来、神様によって反省の日々が続いてきたＫの日記には、この日のことが感謝と喜びが溢れた大きな文字で示されていた。

5.9.2.帰国

２月末、Ｋは二週間の帰国をした後日本に戻った。教会の人たちにお土産を送り、私にも紅梅の掛け軸を送ってくれた。彼女にとって今回の帰国の収穫は大きかったようだ。オリンピックのボランティアでも、英語以外にもう一つ外国語ができた方がいいから、これから自分ももっと努力しないといけないと言った。中国国内のほうが日本よりチャンスが多いと考える劉君は、留学生活を終えて帰国した。Ｋは同じ孤独を感じる張さんと一緒に住む事になり、新しい生活を迎える準備ができた。

Ｋが一杯話をしたいと言ったため、私たち二人は一緒に梅田で食事をしながら、ゆっくり話しをした。彼女が故郷で久しぶりに会った高校の同級生たちは、既に前途有望な青年に成長していた。Ｋは皆に会うのが怖かったのだが、会って無力感が消え、皆からパワー

をもらったという。また、久しぶりに家族の皆と一緒に春節を送ったためか、Kは、両親の人生史やお婆さんとお爺さんの人生まで詳しく話してくれた。かつて彼女は両親以上に立派にならないといけないと思い込んでいたが、話をするうちに、両親が実は自分に何も要求していないし、好きなように生活してほしいというのが親の本音だったと分かったという。

帰り道で、Kは、将来の考えを話してくれた。この夏に弟が大学に受かったら、一緒に雲南旅行へ行き、バイトでためたお金で学校へ行くお金がない児童の援助をしたい。留学を終えたら、好きなところに住み、日中友好に貢献できる文化活動に関する仕事をしたい。「お姉さん、私は夢物語を言っていると思いますか。でも、夢を持てば、元気が出てきます」と別れる前に彼女は恥ずかしそうに言った。数日後、学習意欲が非常に高いKは、学校の履修科目を取り過ぎ、先生に注意されたそうだ。

5.10.初めての花見

時間の経つのは早いものだ。少々寒さが残る中、大阪で2006年の春を迎えた。Kの計画で、張さんと三人で花見をした。連日の雨だったが、4月3日は珍しく晴れていた。時期尚早だが、淀川沿岸の桜がすでに綺麗に咲いていた。雨の洗礼を受けた花びらはすこし白っぽいが、水水しくみえる。Kはすこし髪を切ったようで、薄化粧をしている顔がとても元気にみえる。桜を見ても、川の水鳥を見ても、いつも静かに笑みを浮かべている彼女が印象的だった。

造幣局の川岸では、太陽が暖かく感じられた。祭りの準備で忙しそうにしている人たちの姿が花見のムードを高めてくれたおかげで、すこしワクワクしてきたが、日の当たらないところに並んでいるホームレスの青いテントの家は今でも忘れられない風景だ。あいにく造幣局は12日から開放ということで、有名な桜は今年も見られなかった。すこし残念だったが、張さんがちゃんとカメラを用意してくれたおかげで、写真を撮って楽しめた。

日本へ来て長いが、ずっと忙しくて花見をしようと思うたびに、桜はいつも散ってしまっていた。今年はやっと初めてゆっくり花見ができたと3人は顔を見合わせて笑った。この半日だけの花見でも日本でのいい思い出になるだろう。

終わりに

2006年の4月は、『清風』（教会の月刊誌）が一周年を迎え、日本語学校及び専門学校の留学生に向けても発行が始まった。中には、Kの投稿があり、成功したい自分の苦悩と苦痛が書かれている。花見の時に撮った写真も載せている。淀川の満開の桜を背景にしたあ

の純粋な笑顔がなにより可愛かった。教会には皆の努力のおかげで新しい顔がまた一杯増えてきた。彼らの相談を聞いているＫの姿を見て、師母（牧師の奥さん）は「ここは、天国ですね。」といつも嬉しそうに言っている。はたから見れば、だれも彼女に悩みがあるとは思えないだろう。彼女はすでに新しいスタートをきったのだ。

６．考　察

6.1.Ｋの挫折

本稿の取り上げるケースにおいて、Ｋの父母は、改革開放のおかげで金持ちになったが、同年代の新世代の両親と同じように文化大革命時代に学習機会が奪われ、あまり知識がなかった。Ｋを一流の大学に行かせずに留学をさせた父母は、ほとんどの親と同じように子供のためだけに生きていると言っている。その親の気持ちをくみとり、ほとんどの留学生がＫのように成績でその期待に応えようとしている。

「しかし、幻想を持って日本へ来たら、世間知らずで勝気な自分が突然社会の複雑さを感じ、どうすればいいのか迷ってしまった。…なにより期待していた全てのことは、自分から遠く遠く感じ、その距離は光年で計算できるほどだった。私は苦悶と苦痛に、とうとう劣等感と無力感に陥った。いくら努力をしても、どうしても最初の起点に戻ってしまう。私はもう勇気と力がなくなり、自己否定をし始め、激情に溢れる未来を疑い始めた」。教会の月刊誌で自分のことを告白したＫは、虎のように存在感が強かった昔の自分が病気の猫になり、心が枯れてしまったような時期が長く続いた。

「理想が高い、挫折に弱い」彼らの中には、途中で学校を辞める人もいる（城石・2003）し、バイトに夢中になる人もいる（範・2003）。早く成功したいＫもその中の一人で、受験の失敗や社会の複雑さに直面して、勉強にも人との付き合いにも自信がなくなり、周りの人を信頼できずに長い間心を閉ざしていた。

物語で述べたように、Ｋは視野を広げることと有名な大学に入学することの両立が可能だという留学のメリットを狙って日本へ来た。有名大学を目指すという彼女の目的ははっきりしていた。一年目に国立大学を一校、二年目に有名私立大学を一校、三年目に有名私立大学を一校と公立大学を一校受験してきた彼女は、力をつけながら、目標を実現するために努力してきた。三年目の彼女の綜合成績（533点）からみると、国立大学や有名私立大学は難しくはなかったと言える。しかし、彼女は自分のレベルに相当する大学に行けなかった。その原因を分析すると、彼女が適切な進学指導を受けていなかったことや大学側の入試の不透明さなどのような留学生受け入れ態勢が不備なことが窺える。しかし、有名

大学にこだわる彼女の志望校の選択も重要な原因の一つではないかと考えられる。

もともと思春期から青年期にかけての年代というのは、人間関係に対する不安を感じやすくなる時期である。日本語学校時代の交通事故の一件で、彼女は教師の好意による傷つけられ、「頼んだのに忙しそうで返事をしてくれない」と近くにいた教師を遠く感じている。日本人の友達との歴史認識の違いからKは友達に距離を感じている。経済力が違う留学生や志が違う留学生と付き合いたくなかった彼女は孤立した存在だった。

さらに、親子の殺し合いなどのニュースで恐怖を感じて、日本人に警戒心が強くなったことや、バイト先のホストに憧れている男の子を蔑視しながらも、「銀座の女王」に憧れていることなどの矛盾が、彼女を苦しめたようだ。日中関係が悪化している状況の中、Kは「身を守るために、議論を避けたほうが聡明だ」と考え、本音をだれにも言わないようにしていた。

このように日本の社会道徳の不透明化（田中・2001）に対する認識不足や日中関係が悪化している状況の中、更に試験の失敗や対人関係の失敗が重なり、ずっと高い評価を受けてきた自己像が崩れ、大きな挫折を味わうことになった。

自分を理解してくれたり、受け入れてくれる場がないと絶望を感じたKは、熊本の日本語学校も大阪の専門学校も、当初は教会さえも、自分にとって意味がある場所だとは思わなかった。栄光に満ち溢れ、周囲の賞賛を集めていた過去の姿こそ本物の自分であって、今の自分は本物ではないと位置づけた。未来のあるべき自己像を過去の栄光あるそれと直結させて考えようとしており、今現在の自分はありえないものでしかなかった。これはKの考えだが、新世代留学生のもっとも典型的な考えを反映しているのだろうと考える。

6.2.Kの戦い

日本へ来る前のKは、成績優秀で、勝ち気な人だった。勉強だけに集中している彼らは、純粋で、社会の複雑さを全然知らない。だから、巻頭のMeも本ケースのKも、幻想を持って日本へ来た。しかし、現実は想像と違っていて、生活と学習とバイトに一気に直面して、混乱に陥ってしまった。

「私はここへ来て、勉強をしたいから、バイトをしていなかった。しかし、ずっと混乱を感じていた。生活は混乱していた。バイトを休んで家で整理し、自分を整理する。普通の中国人だったら、皆バイトの時間を増やしたがるが、私はいつも休んでる。しかし、休んでも自分の整理ができない。何をすべきなのか、どこからすべきなのか全然分からなかった（ノート・2005/08/20）」。彼女は自己管理に随分悩んでいた。

自分自身に起った変化に気づき、その改善を求めるKは、色々な方法を使って自分の状

況を変えようとした。買物やヘアスタイルを頻繁に変えることや日記に怒りをぶつけるなどの消極的な方法によってストレスを発散してきた。以下のように、日記を書くことによって自己整理を測り、他人からの学びを通して成長を求めようという積極的な戦いも見せている。神様へ助けを求めることも一つの手段となっている。

A：日記を書くこと

Kは日本へ来て三ヶ月後日記を書き始めた。自分の変化があまりにも大きすぎたのがその理由だった。日記を書くことをとおして、自己の整理ができるし、自分の人生観と価値観が発見できるので、非常にいいことだと彼女は言っている。

元々強いはずの自分と現実の弱い自分の戦いが長く続いていた。失敗の連続から「なぜ計画通りに行かないのか？やはり、理想が高すぎるのか、自分への要求が厳しすぎるのか、」という反省を繰り返してきたが、「やっぱり、諦めない、自分は完璧主義かもしれないが、成功したい、だれより成功したい、早く成功したい」という辛い叫びを上げ続けてきた。

暗い時期には自分の苦悩を聞いてくれる人も、自分を励ましてくれる人もいなかった。だから、日記に写した成功した人々の物語から、力を得ようとした。自分が時代に遅れていると感じ、怖がりながら、新聞やニュースで世界を掴もうとした。「今日は、日本人と一緒に盆踊りに行ってきた。たくさんの日本語を話した。すこし進歩を感じた。今日は進歩があってよかった」。成長意識が強いKは、ささやかなご褒美を日記で自分に与えている。

B：他人を通しての学び

「私は他の人と違い、早く成長したい。だから、皆に指摘されてうれしく思う。指摘されると私は直す」。Kの他人を通して学びたいという意識を、私は初めての彼女との話しあいで強く感じた。

「今までだれからも叱られたことがなかったよ。でも、彼の言うことが正しいから、私は直すべき」と劉の叱りを彼女はしっかり受けとめた。寂しがりやの二人は、お互いに支えあいながら、暮らしてきた。引越ししたくなかった理由は彼から政治と軍事に関する知識を聞けなくなるということだった。

バイト先の女の子を見るときも、隊長の小椿を見るときも、Kはいつも「直す、直さない。」という言葉を使っていた。彼女は年配の人との付き合いが好きで、解放にもよく勧めていた。「年配の人から、よい人生の勉強ができるから。」と彼女は考えていた。だから、引越しの相談をする前に、彼女は私の履歴を全部聞いたし、熊本の小蘭との同居経験も無駄だと思っていなかった。

C：神様へ助けを求めること

日本へ来て、自分自身に起った変化に気づき、その改善を求めるKは、積極的だった。長い間「両親に心配をかけたくない。でも、相談できる人がいない」と思っていたKは、教会の人と話しもしなかった。しかし、信仰に熱心な同世代の人をみて、彼女は「この神様を心の中まで迎えたい。自分を変えてほしい。」と修練会に参加した。

感銘を受けたKの変化は大きかった。周りの人たちを全部見直し、心が柔らかくなり、なにより教会を家だと思うようになった。日記でも、怒りと弱気の雰囲気が一気に変わり、神様への告白によって反省の日々が続くようになっている。人間は人間から離れるのではなく、人間を愛すべきだという認識の正しさを確信し、キリスト教の真理が自分の鏡になった。「人間に苦労をさせる神様の意図は、人間を高めるためである。そう考えれば、耐えられるのだ。」と彼女は悟り、現実を受け止めるようになった。

6.3.教会の役割

若者が宗教に関心を持つのには様々な理由があると思われる。Kの場合は、神秘なものを信じる潜在意識が元々強かった。マージャンをしている父親の後ろに立つだけで父親がマージャンに急に勝ったりしたことも、自分の不思議な人生も、まるで神様の助力があるように思ったし、大学入学での意外な展開と長年願っていた引越しの実現から、神様の導きを感じたと本人は言った。

神様の恵みを受けている彼女は自分のことをこのように語っている。「よく考えたら、私は自分のことを全くわかっていなかった。期待が高すぎた。たとえば、100階の階段があったら、翼が付いていたとしても、1回だけでは登ることができないだろう。それから、信仰が私の鏡になったことで、自分のことをはっきり見えるようになり、再び立ち上がれるようになった。(『清風』・6期)」という。さて大きな成長を見せてくれた彼女にとっては、教会がどのような存在なのかと以下の4点から考えてみよう。

① 助けが求められる場

教会の人たちは皆貧乏だし、話しも合わないと感じたKは、教会に来なかった時期があった。しかし、彼女の初めての旬長である青年3隊隊長の小椿は、彼女のことを諦めずにずっとメールや電話で声をかけていた。彼女の全てのことを相談に乗っている小椿は積極的だった。そのおかげで、彼女の心が暖められ、再び教会に来るようになったのだ。教会の人と話しをしたくなかったが、会うたび挨拶をしてくれる聖劇隊副隊長の黄から彼女は自分の存在感を感じたという。学園祭の成功も教会の皆の助けが欠かせなかったし、受験の失敗からショックを受けたKを慰めてくれたのも、教会の先輩たち

だった。確かに教会にいると、どんな時でも相談に乗ってくれる旬長たちや、バイトを紹介してくれる皆、学費を貸してくれた皆から、彼女は愛を感じないわけにはいかない。だから、旬長の話を聞き、神様の救いを求めるために日々お祈りをしていたＫは、修練会で皆の間の愛に感動して元の自分を取り戻そうと考えるようになったし、誕生日の祝い中で皆に「小椿から、人間の愛を知り、現在の旬長から神様の愛を知った」と言った。

② 自己探しの場

初めて親から離れ、自分の想像と全然違う日本の社会に出会ったＫは社会の複雑さに直面して、様々な矛盾を感じ、自分の本心を隠すようになった。しかし、教会の皆との出会いやキリスト教との出会いは彼女を変えた。6.2Ｋの戦いでも述べたように、Ｋはキリスト教の信仰によって、是と非の基準がはっきりし、自分に直面できるようになり、暗い時期から立ち上がり、再び笑顔になれたと『清風』で語っている。Ｋのように、自己探しの時期とも言える思春期の少女、少年は、常に自分のポジションをどこに置けばよいか迷いながらも、どこかで社会に対しても自分に対しても高く期待している。善悪を判断する能力が十分にそろっていないまま、社会に出ると、従来の価値観、人生観が崩れやすい。しかし、皆と日々の聖書学習をし、教会に設けている哲学や心理講座を聞き、議論を重ね、そのおかげで、彼女は本当の自分を見つけた。

③ 自分の能力を養う場

本を読むのが大好きな彼女は、政治や金融などのことを一杯知りたいが、日本語が読めないことを残念に思ったし、ずっとギターを習いたかったが、実現できなかった。しかし、教会での活動ですこしだけこの残念な気持ちが癒された気がすると彼女はうれしそうに話したことがある。自分の心を閉ざしたＫは一時期皆と付き合いたくなかったが、聖劇部の活動にずっと熱心だった。「聖劇をやるのが面白い、北京放送大学に行く夢が叶えられなかったこととも関係がある。」というＫの日記から、聖劇活動が彼女にとっては大きな意味を持っていることが分かる。彼女は自分で脚本を作ったり、台詞を考えたりする聖劇活動では自己表現ができて、生きがいを感じただろう。Ｋは様々なことに興味を持っているようだ。教会で中国語の新聞を読んだり、必要な部分を切り抜いたりしている彼女の姿を何回もみかけた。牧師の普段の説教からも、土曜日の『異性交際』の講座からも、生活の知恵を得ようとしている彼女は積極的だ。知識が増えれば能力も強まると考える彼女は教会を中国語の情報源としても、利用しているのだろう。

④ 自分の能力を発揮でき、存在感を与えてくれる場

日本語が上手になるに伴い、Ｋは趙（Ｋと同じ旬の男の子）の日本語の補習教師にな

り、ずっと教えてもらってきた中旬長に中国語を教えるようになった。成長が早い青年3隊の隊長の小椿や、悲しみを抱きながら笑って生きている海燕のようなずっと彼女に無視されてきた教会の同年代の人たちは、彼女にとって尊敬できる存在になり、『清風』編集部の張は、彼女と語り合える友人になり、解放やKの旬員が彼女の援助の対象となっている。ここで、Kの豊かな感情が彼らの存在によって引き出され、彼らの存在を通して、K自身に豊かな個人を実感させてくれているのだろう。青年3隊の隊長の小椿もいつも学習好きなKを手本にしていると言っている。人に愛され、人を愛し、人に必要とされる存在感を与えてくれた教会は彼女に自信を付けてくれる場であり、ここで自分を見つけた彼女は、神様によって救われたと言っても過言ではない。

要するに、彼女にとって、教会は、色々な意義がある場所である。このような安心して相談できるところで、自分の才能を養い、色々な知識を身に付け、活躍できるようになったKは、この場所で過ごしたおかげで、大学に入学でき、友人も出来、将来への不安が段々なくなり、安心できる自分の世界が出来たのである。周囲から必要とされているという実感は、自分という存在のかけがえのなさと結びついて、生の充実感をもたらしてくれる。教会のシステムへの参加が他者との深い関りの中へ入っていくきっかけとなり、己のかけがえのなさを実感していく契機として、彼女のような若者の居場所をより広げていくことになったのであろう。

7．まとめ

本稿で取り上げたKの物語では、他者によって壊れた自己が、他者を通して再構築されるKの成長過程が示されている。絶望から様々な困難を乗り越え、立ち上がってきた彼女の精神的な成長にとって、家のようなかけがえのない教会という居場所の重要性があきらかになった。居場所とは、個人が安心して自己を認められる空間であり、また他者との関わりの中でそのつながりが保障される場である。しかし、数多くの留学生が居場所を感じていない（範・2003）。そこで、Kのような少女から大人への過渡期を日本で過ごしている留学生たちへの支援を考えるには、以下の4点が日本語教育への示唆となるだろうと考えている。

① 安心して相談できる環境づくり。場所を保障するとともに、積極的に学生の相談に乗る人の確保も必要だと思われる。

② 言語学習より、より大きな意味での知識の伝授が出来る場。若者の自分探しに繋がっている哲学や社会学などのようなものの教育が要求されている。

③　自分の能力を養うことが出来る環境。日本語の学習だけではなく、自分の趣味なども養うことが期待されている。

④　集団の中の一員として活躍できる場。自分の能力が発揮でき、他人に必要とされる存在感を与えられる場所の保障が必要とされる。

【注】

1）「新世代」は中国語では「新生代」であり、「新・新人類」と同じように「一人っ子世代」のことをさしている。70年代末からの人たちは従来の人達とは違うということを強調する言葉として、中国で一般的に使われているので、本研究では「一人っ子」も「新・新人類」も「新世代」も同じ意味で使っている。(「一人っ子」は中国語では「独生子女」)

2）一人っ子政策：中国語では「計画生育政策」という。中国の「一人っ子政策」は、国民の生活水準を維持・向上させるため、経済発展と人口増加との間に生じた不均衡を、人口の抑制によって調整することであった。中国政府は、1970年代の前半から緊急の産児制限政策に入ったが、1979年には更に強化して、「一人っ子化」計画出産の国策を打ち出し、少数民族地域を除く全国で実施に踏み切った。1981年には、国家計画出産委員会が設置され、計画出産の統一的管理を行うことになった。1982年末に制定された現在の憲法では、25条と49条で具体的に規定され、基本国策の一つに据えられたのである。その後は、国をあげての協力のもと、奨励措置と制裁措置が行われた。本格的な「一人っ子政策」が実施されて、既に20年を経過した今日、「一人っ子」の家族形態は、中国の家庭の基本パターンとして広く定着している。1995年の統計によると、全国「一人っ子証明書」を持っている一人っ子は既に8000万人に達している。

3）グラウンデッド・セオリーは1960年代から医療看護従事者たちが用いている質的研究の代的な1つである。起源は社会学にあるが、どんな研究分野においても活用することができ、心理学、医療あるいはビジネスの研究でも使用されている。グラウンデッド・セオリーの理論的枠組は、シンボリック相互作用論の洞察から導かれており、人間の行動を探求する人々と社会的役割の間の相互作用のプロセスに焦点をあてている。この研究方法の主な特徴の1つは、データから理論を生成することであるが、現在ある理論がこの方法によって修正されることもあれば拡大することもある。この研究方法でいうセオリーとは、以下のことを意味する。2つまたは3つ以上の概念の間の関係を明らかにすること、そして何が起こっているのかを説明するために、調査している現象について系統的な観点を提示すること。

4）第三次の留学ブーム：近代における中国人の日本留学について、段（2003）によると、1896年から1910年代まで続いた日本留学を第一次のブームとしているのに対して、1978年「日中平和友好条約」をきっかけに、鄧小平の開放政策を背景に第二次のブームが起こった。筆者は「一人っ子世代」の日

本留学が今までの中国人留学生と様々な違いがあると修士論文で明らかにした。そのため、混同することはできないと考え、「一人っ子」たちが大量に日本へ来ていることによって、第三次の日本留学ブームが形成されていると筆者は主張したい。

5）準旬長は旬長になる準備をしている人たちのこと。教会は留学生を管理するために、青年1隊、青年2隊、青年3隊を成立した。青年3隊には漢民族の中国人留学生が中心となっている。ほぼ89人。青年隊の中には旬が設けられ、基本的な単位となっている。4つか5つの旬は一つの中旬となっている。旬のリーダーは旬長といい、中旬のリーダーは中旬長という。

6）「十分の一」：キリスト教の献金のこと。「十分の一」は収入の十分の一のことを指している。献金は神様に捧げるものだから、基本的に個人の意志で決めることで、けっして出さないといけないわけではない。

【参考文献】

井上孝代（2001）『留学生の異文化間心理学：文化受容と援助の視点から』玉川大学出版社

奥田純子（2003）「日本語学校の学生事情」『月刊日本語』2003年7月号，pp.15-17

金沢吉展（2002）「日本文化への適応と援助―異文化接触の心理学」海保博之他編 『日本語教育のための心理学』新曜社

ゴウ，リサ・鄭瑛恵（1999）『私という旅：ジェンダーとレイシズムを越えて』青土社

桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房

嶋本圭子（2004）「中国人就学生が語る日本での経験～日本語学校における『問題』を理解するために～」大阪大学大学院文学研究科修士論文（未刊）

白佐俊憲・呉小娟（1998）「中国での一人っ子を巡る諸問題」『北海道女子大学短期大学部研究紀要』34号，pp.35―56

白石勝己ら（2005）留学生情報WEBサイト『JAPAN STUDY SUPPORT』2005年7月最新情報　財団法人アジア学生文化協会教育交流事業部　アクセス日：2006年6月10日

周枳成（2002）『少年留学三思而行』広東教育出版社

祝蓓里ほか（2001）『愛与成長－第一代独生子女大学生心録』華東師範大学出版社

城石しのぶ（2003）「語りからみた、日本で学ぶ留学生の自己変容～〈中国人留学生〉という枠のムコウ～」大阪大学文学部卒業論文（未刊）

徐利佳（2004）「在日中国人日本語学校生のアルバイト生活に関する考察」大阪大学文学研究科修士論文（未刊）

鐘家新（1992）「中国人の都市における一人っ子を溺愛している親たち－『一人っ子政策』を背景として－」『母子研究』13号，pp.36－37
田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
段躍中（2003）『現代中国人の日本留学』明石書店
中井好男（2005）「日本語学校での『再履修』が日本語学習者に及ぼす影響～『再履修者』の学習環境という観点から～」大阪大学言語文化研究科修士論文（未刊）
南裕子（監訳）（1999）『質的研究の基礎－グラウンデッド·セオリ－の技法と手順』医学書院
範玉梅（2003）「日本語学校における一人っ子の中国人留学生の増加現象――背景・問題・対応策の提案」大阪大学文学研究科修士論文（未刊）
範玉梅（2005）「日本語学校における一人っ子の中国人留学生の増加に伴う問題」『阪大日本語研究』17，pp.59-90
やまだようこ編（2000）『人生を物語る―生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房

（博士後期課程学生）
（2006年８月25日受付）
（2006年10月５日修正版受付）
（2006年11月１日再修正版受付）
（2006年11月16日掲載決定）